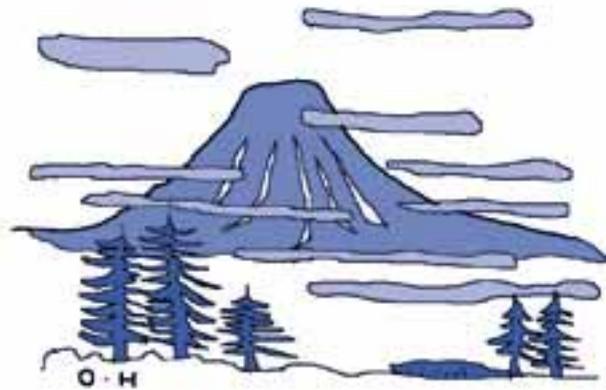


## 夏の羊蹄



星田 理

エッセイスト

私のふるさととは、羊蹄山のふもとにある京極町である。今は札幌に住んでいるが、その町で高校時代まで過ごした。ふるさと、といっても、いまは生家もなく、町に残っているものは小・中学校の学籍簿くらいなものである。だが、子供の頃の思い出がいっぱいある。夏になって、近くの手稲山の緑が濃くなると、羊蹄山を思い出す。青い空にゆっくりと流れる白い雲、山巒<sup>やまひだ</sup>にくっきりと残った雪、そんな羊蹄の姿を思い出すと、もうじっとしてられない。パソコンをのぞき込んで、後志地方の天気予報をみる。雨上りで、空気が澄んで、晴れた日を探す。そんないい日は滅多にないが、何んとか探し出してふるさとに向かう。中山峠まで車で行くと前方に羊蹄山が見える。山並みの中にぽっかりと浮かんだ羊蹄の姿を見ると、ほっとする。

生家の近くに蹄鉄屋<sup>ていてつや</sup>があった。蹄鉄屋の夏の朝は早い。朝6時になると時を知らせるように鉄を打つ音が聞こえてきた。トッテンカン、トッテンカンというその音は、田舎の朝を眠りから覚ました。近所の人たちは、その音を聞いてから朝の仕事に取り掛かったものだ。

その頃は農耕馬が農家の大切な働き手であった。たいていの農家には1、2頭の馬がいたから、蹄鉄屋の仕事は忙しかった。蹄鉄屋の前にはいつも馬がつながれ、蹄鉄を取り替える順番を待っていた。蹄鉄は年2回取り替えられる。一回目は雪が融けた春先で、底の平らな蹄鉄になる。もう一回は雪の降り初めの頃で、馬の足が雪で滑らないよう底に突起が付いたものに変わる。

その蹄鉄屋に正ちゃんという青年がいた。4、5歳年上だった。正ちゃんは、毎朝鉄を打っていたから腕っぶしが強く、近所でも評判の働き者で、遊んでいる姿など見たことがなかった。だが正ちゃんには楽しみがあった。それは羊蹄の登山だった。その頃は登山道ができて2、3年しか経っていなかった。町から登山口までは3キロほどで、登ろうと思えばいつでも登れる距離にあった。正ちゃんの登山は、他の人とは違っていた。一日の仕事が終わって夜になってから登り始め、翌朝の仕事の時間には帰ってきていた。登山道は、山頂までの距離は短いが急なコースだったので、素人にとっては難しいコースといわれていた。だが、

日ごろから体を鍛えている正ちゃんは、登り4時間、下り3時間余で登り下りができた。登山に行った日も、いつもと同じように仕事をしていたから、並みの体力の持ち主ではなかった。

高校3年のある夏休みの夕方のことだった。正ちゃんが珍しく私の家に来た。羊蹄の雪も融けたし、一緒に登って見ないか、というのである。当時、通学で毎日12、3キロの道のりを歩いていたから足には自信があったが、登山は初めてだった。はたして正ちゃんに付いていけるか、それが心配だった。だが正ちゃんは、私のペースに合わせて登るから大丈夫だよとってくれた。

登山の日になった。家を出たのは夜の8時過ぎ、登り始めたのは9時頃だった。原始林の夜の道は気味が悪かった。ざわざわと木の枝が揺れたり、時折木の茂みの中から、得体の知れない物音が聞こえたりした。かすかな月の光の中を、懐中電灯の明かりで足元を照らしながら、一合目、二合目と書いた標識を目当てに、注意しながら登っていった。五合目あたりに来ると風が体に当たるようになって、ひんやりとした山の空気は体に心地よかった。頂上に着いたのは、午前2時ごろだった。さすがに疲れた。持っていったおにぎりを食べてから山頂の石室<sup>いしむろ</sup>で仮眠することになった。「あと2時間ほどたったら陽が上がってくるよ」と正ちゃんがいった。

眠ってまもなくだった。正ちゃんに起されて外に出た。はるか下の方の山並みがうっすらと白みはじめていた。連峰の山々の一点が明るくなったその瞬間だった、まばゆい光が差し込んできた。ご来光であった。光は広がって、雲海の中に美しい形となって散りばめられていった。私はしばらく立ったまま、動くこともできなかった。しびれるような感覚が体を突き抜けていった。

私とその場に釘付けされたように立っていると、「もうちょっと先に行ってみよう」という。もう20回以上も登っている正ちゃんには、この光景は見慣れたものだったのだろう。少し歩くと、眼下に噴火口が見えた。すり鉢状の底には雪が残っていた。周囲が4キロもあって、この雪は消えることがないと教えてくれた。

「そろそろ、下山しようか」。

下りの坂道は厳しかった。八合目付近まで下り

てきたときだった。大きな岩が二つ並んでいる場所があった。「ここで、ちょっと休んでいこう。この岩の上から眺める景色が良くてね」と正ちゃんがいった。そこからは、町や村がまるで箱庭のように見えた。汽車が黒の木綿糸のようにかすかに見えた。その汽車の線は、胆振線という国鉄のローカル線であった。今はなくなっているが、私が毎日通学に乗っている汽車だった。ちょうど倶知安の駅を出発したばかりだった。

眼下に広がる景色に見とれて、ぼんやりしていた時だった。正ちゃんがポツリといった。「僕の子供の頃の話をしようか」正ちゃんの身の上話はこれまで聞いたことがなかった。「僕は東京の深川に住んでいたんだ。あれは昭和20年3月9日の朝だった。B29(爆撃機)が、空を真っ暗になるほど飛んで来て東京の街を空襲したんだ。僕の家は雑貨屋をやっていたが、家は焼かれ、親父もおふくろも空襲で死んでしまった。その後、孤児院にいたけど、北海道に行かないかといわれて、運良く今の蹄鉄屋にもらわれてきたわけさ」。「これが親父とおふくろさ」と懐から写真をとり出した。「羊蹄に登るときには、いつも持ってくるんだ」と笑った。

考えても見なかったことだった。私は胸が締め付けられる思いがした。正ちゃんはそういうと、さっぱりした顔をして、「さあ、下りようか。長く座っているとかえって疲れるからね」と立ち上がった。私も正ちゃんのあとに続いて山を下り始めた。下を見ると、倶知安の駅を出発した汽車が、もう京極の駅に近づいていた。

これは、50年も昔の思い出である。

今年の夏も、羊蹄は今も昔も変わらない、あの雄大で美しい姿を見せているのだろう。

参考資料：昭和・平成現代史年表 協力：札幌管区気象台

## profile

**星田理** ほしだ おさむ

1937年京極町生まれ。'61年北海学園大学卒。北海道開発局退職後は、民間勤務。現在は業界月刊誌にエッセイ連載中。囲碁四段。家族：妻、中国新疆ウイグル自治区出身の青年。